

古文書倶楽部

【発行】
秋田県公文書館
2020. 7
第96号

【史料群紹介】 「混架資料」の日記類

当館が所蔵する古文書史料には、当館が平成五年（一九九三）に開館する以前は秋田県庁、秋田県立博物館、旧秋田県立秋田図書館（以下「旧秋田図書館」）に収蔵されていた史料群に加え、当館の開館以降にご寄贈していただいたものなどがあります。

今回はその中から、「混架資料」という史料群をご紹介します。それにしても、「混架」とはまた変わった名称ですよね。実はこの史料群は、旧秋田図書館が昭和二三年（一九四八）以前に収集したもののうち、未整理となっていた史料とされています。

そのため、旧秋田図書館時代に「郷土資料」などとして整理された史料の多くには図書館分類法による資料番号が付けられているのに対して、混架資料は当時の書架の番号に応じた資料番号が付けられています。

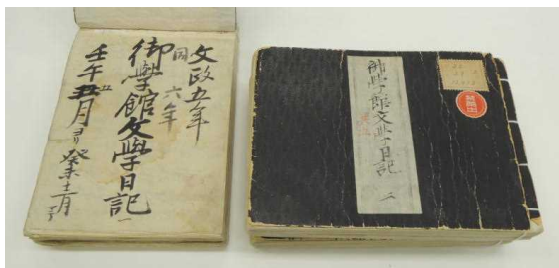
そんなに長く「未整理」であつたのなら、あまり価値がないのではないか？と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、この「混架資料」は貴重な史料を数多く含む史料群なのです。その分野も藩政・幕政に関するものから、

企画展（前期）「所蔵資料にみる秋田の行事とくらし」を当館二階特別展示室で開催します。期間は、八月二十四日（月）～九月二十二日（火）です。入場無料です。ぜひお越しください。

地誌・伝承、戊辰戦争、儒学・国学などの思想、軍学・史学・医学・博物学・天文学などの諸学間など多岐にわたっています。また絵図が四五点あり、その中には蝦夷地関係の絵図が十一一点含まれています。今回はその中から、日記史料を三つご紹介します。

《野上陳令日記》

野上陳令（国佐、一七七四～一八四六）は、秋田藩の藩校明德館の祭酒（最高責任者）や藩の評定奉行、能代方御用、銅山方吟味役などを歴任した人物です。実は「野上陳令日記」という史料名はなく、彼が残した日記三九冊の総称としてその名があります。個々の日記には「銅山方吟味役御用日記」「御学館文学日記」などの史料名が付けられており、秋田藩のいわゆる改革派官僚として行政に携わった人物の記録として貴重な史料となっています。陳令の義理の息子である野上陳孝の日記も三二冊所蔵しています。



野上陳令日記（御学館文学日記）

《初岡綱正日記》

初岡綱正（敬治、一八二九～一八七二）は幕末から明治初期にかけての秋田藩士で、明德館教授、新政府の立法院であつた公議所の公議人、集議院議員、秋田藩権大参事などを歴任しました。新政府の開国和親政策を誤った欧化主義であるとして批判するなど活発に活動しましたが、明治三年（一八七〇）の反政府事件に連座して捕えられ、翌年に刑死しました。当館は文久二年（一八六二）から明治四年までの日記七冊を所蔵しています。（「秋田市史叢書」平成十三年刊行）

《石井忠行日記》

「伊頭園茶話」の著者石井忠行（一八一八～一八六九）の日記です。石井忠行は大坂詰め勘定吟味役や、蝦夷地の御持場見分御用出役、財用奉行などを歴任し、戊辰戦争にも参加しました。この日記は十二冊（道中日記一冊を含む）で、弘化二年（一八四五）から明治二六年にかけて記述されています。その大半は藩政に関わる内容で、明治に入ってから廃藩置県など新政府の政策について記された内容が多くなっています。

その他「混架資料」には、令和二年三月に県指定文化財となった「岡本元朝日記」や、天保年間に編纂された「郡邑記」の編者である大越国信の日記などが含まれています。

今回紹介した日記の他にも、前述したように多彩な内容が含まれた史料群となっていますので、多くの方に利用いただければと思います。

【煙山英俊】

県政映画上映会

令和二年八月二十八日(金)開催

県では、昭和三十年から印刷物やラジオによる広報に加えて県政紹介の映画を導入し、映画館での幕間に一〇分間程度の映画を上映しました。

公文書館では、当時の映像をDVD化して所蔵し、月替で毎日五話程度、閲覧室内のテレビで上映しています。また、年二回、プロジェクトで大型スクリーンに投映する「県政映画上映会」を開催しています。

今稿では、所蔵DVDの中から、昭和三十四年一月に上映された「県政ニュースNo.十八」の内容の一部をご紹介します。終戦から十四回目の年末年始を迎え、生活に落ち着きを取り戻した頃の映像集です。

【あけゆく一九五九年】

鳥海山麓でのんびり牛を飼育する農家の映像です。庭先で幼い娘さんが牛の親子の世話をしている仕草がとても微笑ましく見えます。牛は当時オーストラリアから輸入されたジャージー乳牛。現在も鳥海高原や仁賀保高



原で飼育されている品種で、この頃には既に飼育されていたことがわかります。

【八郎潟干拓工事】

浚渫船の作業と堤防内側の模様です。七年後の完成を目指して、二年目に入った八郎潟の干拓工事。浚渫船から揚げられる土砂、一日市町沖に造られる人工の島、工事最大の難関といわれた深い泥の上への堤防工事が記録されています。

また、船越・払戸間を一直線に結ぶ西部干拓堤防の内側約一五〇haの排水も行われ、県の土壌試験で「西部干拓地では反当たり三〇〇キロの米は確実に採れる」と太鼓判、と明るく伝えていきます。

【県庁舎建設工事】

昭和三十二年に火災で焼失した旧県庁舎。昭和三十三年三月から始まった新庁舎建設工事の模様です。昭和三十四年十二月の完成をめざして、地上六階地下一階の本庁舎建築工事のうち、地下と一階部分のコンクリート打込み作業が終わったところです。コンクリート工事は、二〇日間で一階ずつのスピードで進められている、と伝えていきます。冒頭の上空映像では、建設地の周辺は、見渡すかぎり田んぼ。町名も現在の「山王四丁目」ではなく、当時は「秋田市川尻字八十刈」と呼ばれていました。鉄筋コンクリート造の構造も「永久建築」と紹介されており、時代が感じられます。

【とれたぞハタハタ(金浦町)】

由利郡金浦漁港のハタハタ漁の模様です。漁期を迎え産卵のため港に寄せてきたハタハタを、直径一mあまりの丸網「輪つか網」ですくい獲る独特な漁法で、四人乗りの手漕ぎ船で漕ぎ出した漁師が、冬の荒波の上



で壮観な作業を展開します。舟歌のBGMも入って雰囲気もよく伝わってきます。水揚げされたハタハタで足の踏み場もない漁港内の魚置き場からスコップで箱詰めされていく映像を見ると、漁港周辺だけなのに、たった一日でこんなにたくさん獲れていたのか、と驚かされます。

【とよならランプ生活(鷹巣町)】

開拓村の電灯工事完成祝賀の模様です。当時、本県の開拓地の三分の一ではランプの生活を送っていました。鷹巣町岩坂地区の開拓農家では、新しい年とともに、電灯の生活に入ることになりました。作業を見守る子供たちの顔も嬉しそうです。開拓地に入って一戸あたり三haの雑木林の開拓に取り組んでから一〇年、ようやく迎えた点灯式に県や役場の人達も顔を見せ、喜びをともにする様子が記録されています。

【高橋正弘】